

---

# ディアボロは非日常な日常に投げ込まれる！

ごくでヴある

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ディアボロは非日常な日常に投げ込まれる！

### 【Nコード】

N7397X

### 【作者名】

ごくでヴある

### 【あらすじ】

この話には多少ディアボロの大冒険の設定が加えられています。そして原作のディアボロが大好きだ！という方はあまり期待しないで見るかそのままバイツァ・ダストしてください。

後、ジョジョの原作キャラは最初にブッチ神父が登場しますが以後登場しません。

ディアボロ以外は出ないと思っていてください。

スタンドは主に第6部までのスタンドが出ます（ステイル・ボー・ランを作者が持っているため）

後、スタンドの解釈が間違っていると気づいたときはぜひとも意見をください！今後の参考にもなります。

・・・注意書きが長くなりましたがあらすじです。

ディアボロは不思議なダンジョンから放り出され、プッチと戦い死んだ。

そして再び死に続けていくのだった。

しかし、再び死に続けたディアボロはあるところに迷い込んだ。

そしていつまで経っても死なないことに不思議に思ったディアボロは回りの搜索に行くのだった。

## 世界の一巡の終わりと新たな始まり（前書き）

あらずじにも書いたようにこの話には多少ディアボロの大冒険の設定が加えられてます。

そして原作のディアボロが大好きだ！という方はあまり期待しないで見るかそのままバイツァ・ダストしてください。

後、ジョジョの原作キャラは最初にブッチ神父が登場しますが以後登場しません。

ディアボロ以外は出ないと思っていてください。

スタンドは主に第6部までのスタンドが出ます（スティール・ボール・ランを作者が持つていないため）

## 世界の一巡の終わりと新たな始まり

「・・・今日もまた最後までたどり着けなかったか」

男はそうつぶやくと部屋の中の布団に寝転んだ。

男の名はディアボロ。

イタリアの元ギャングのボスだ。

彼は、世界を支配できるほどの力を持っていた。

しかし、ゴルド・エクスペリエンス・レクイエムジョルノ・ジョバァーナのGERによって永遠に死に続けることになってしまった。

その死に続いている中で、ディアボロはある場所に迷い込んだ。

そこは不思議なダンジョンと呼ばれる無限に迷宮が増えていく場所だ。

ディアボロはそこで永遠に死なくなる願いをかなえるために進んでいた。

結果的には、まだその願いはかなえられてはいない。

しばらくベットに転がっていたディアボロだが空間に何らかの違和感を感じた。

家の中がゆがんで見えているのだ。

「こ、これは！」

ディアボロは咄嗟に近くに置いてある亀を手につかんだ。

「どうやら、世界の一巡が始まったみたいだね」

すると、この家の中にいる露伴がしゃべった。

彼はいつもこの家の中にいる。

最初、ディアボロはなぜこの男がいるのか不思議に思っていたが自分のことで精一杯だったので無視していた。

「世界の一巡？ どういうことだ」

ディアボロは露伴に聞いた。

空間はますますゆがんできているので時間がないように思えた。

「世界は一度滅んだ。そして今は、新たな世界が構築されようとし

ているんだよ。・・・この、GERの作った空間が壊れようとして  
いるのも新しい世界ができる何らかの力が及んでいるからだろうね」  
ディアボロはその言葉を聞いて啞然とした。

このダンジョンにはDISCと呼ばれるスタンド能力が封じられた  
物が落ちていた。

ディアボロはそれらも集めていた。  
自らを守るために。

ディアボロはこのダンジョンを制覇すれば死に続けないと思ってい  
た。

いや、そう思わないと自分の心がもちそうになかったのだ。

それなのに・・・この世界すらもジョルノ・ジョバァーナのGER  
のまやかしにすぎなかった。

「何だと・・・それでは、俺は結局・・・ジョルノ・ジョバァーナ  
の手のひらの上で踊っていたにすぎなかったというのかあああああ  
ああああ！！！！」

消え行く空間の中で、ディアボロの悲痛な叫びが響いた。

そしてそれは、ディアボロの中で大きな亀裂を作ろうとしていた。

しかし、亀裂はできなかった。

「それは違うよ、この世界を作って君をここに呼んだのはGERだ。  
けど、これまでしてきたことはすべて君がしたことなんだよ。そし  
てそれはこの空間がなくなった先でとても役に立つ」

露伴が言ったその言葉でディアボロの心が折れることは無かった。

そして、ディアボロは露伴の顔を見た後崩れた空間の中に落ちてい  
った。

「ディアボロ、君に頼みたいことがある。プッチのスタンド、メイ  
ド・イン・ヘブンを倒してくれ」

気がつく、ディアボロは刑務所の中にいた。

どうやら階段のところらしい。

ディアボロは念のためにメタリカ、ザ・ワールド、ホワイト・アルバム。

そして、元からあるキング・クリムゾンを頭に入れた。

ディアボロはメタリカで見えなくした。

さらにキング・クリムゾンのエピタフで近い未来を見た。

そこには・・・少年が妙なスタンドを持った男に襲われているのが見えた。

そのスタンドはディアボロが見たことの無いスタンドだった。

正直戦わなくてもいいだろう。

だが・・・

「たとえこれがジョルノ・ジョバァーナの策略でも、俺は岸部露伴に頼まれた。だったら、するまでだ」

次の瞬間、予知で見た少年が出てきた。

そしてその少年はディアボロのいるほうに走ってきた。

だが、その少年は箒を踏みその棒が顔面に当たった。

そして飛んでいって壁に吸い込まれた。

いや、壁の隙間に入ったというべきか。

そして、予知で見た黒人で神父の服装をした男・・・プッチが走ってきた。

ディアボロはタイミングをまった。

「（自分に最も近い距離まで・・・3、2、1・・・いまだ！）」

ディアボロは背後からキングクリムゾンを出してプッチのスタンドを殴りつけた。

・・・はずだった。

だが、その攻撃はあたることはなかった。





そしてディアボロは世界の一巡が無効になったあとにも死に続けることとなる。

だが、ディアボロは知らない。

再び死に続けたその先で、何が起こるかということ。

## 世界の一巡の終わりと新たな始まり（後書き）

ディアボロの性格がやわらかくなっているのは死に続けた体験をしてさらに不思議なダンジョンでも死に続けてその間に自分のことを客観的に見れるようになって自分が最低な人間だったことに気づいたからです。

ちなみに今後のディアボロの目標はゴールド・エクスペリエンス・レクイエムGERの能力から開放され平凡に暮らすことです。

・・・吉良吉影と同じ考えになりましたね。

## ディアボロ、死す！？

幻想郷、それは人間と妖怪が共存して暮らす楽園。  
幻想郷には忘れ去られたものが流れ着く、忘れ去られた場所なのである。

そんな幻想郷には、外来人と呼ばれる外から流れ着く者たちがいる。  
だが、外来人はたまたま流れ着いただけの者が多い。  
なぜなら、人間が忘れ去られることなど無いに等しいからだ。

「はっ！？次は、次はどこから襲ってくる！？」

ディアボロは咄嗟に周りを見渡した。

周りをみると木がたくさんあることから森の中ということがわかった。

ディアボロはそれを知るとさまざまな死に方を想像した。

熊に襲われて再起不能、木が倒れてきて再起不能、蛇に襲われて再起不能、毒キノコを食べて再起不能、絶望の番人に襲われ再起不能などさまざまなことを。

しかし、それらはディアボロにとってすべて経験した死に方だ。

実はディアボロの死に方にはある特性がある。

それは、一度死んだ死に方では死なないということだ。

だが、それは角度、攻撃、時間などがかさならなかったらの話だ。  
しかし、ディアボロはすでに地球上の生命の数以上は死に続けている。

つまり、その数だけでもう死ぬことは無いということだ。

だが、死に方にはさまざまなものがある。

だからディアボロは今も死に続けているのである。

ディアボロは落ち着くために深呼吸をすると地面に寝転がった。

いつ死んでもいいように気持ちを落ち着かせているのだ。

・・・だが、十分経つてもディアボロは死ななかった。

おかしい、ディアボロはそう思った。

いつもならこのころにはもう死んでいるはずなのだ。

ディアボロは、地面に寝転がるのをやめて立ち上がった。

「・・・周りを探索してみるか」

探索していたらそのうち死ぬだろう、ディアボロはそう思った。

ディアボロは森の中を探索し始めた。

それと同時に、ディアボロは久々にスタンドを出してみた。

「・・・キング・クリムゾン！」

すると背後からディアボロ自身のスタンドであるキング・クリムゾンが出てきた。

そして、ディアボロはエピタフで未来を見た。

だが・・・それでディアボロはあることに気づいた。

「なに・・・」

それは、エピタフが未来予知した未来が3、4秒後のものだったということだ。

ディアボロのスタンドであるエピタフは通常十数秒後ほどの未来を見ることができる。

それがたった数秒後の未来しか見えないということは。

「スタンドが・・・弱体化しているだ」と

ディアボロはその事態を知るとある過程が浮かんた。

スタンドとは、いわば精神が具現化したもの。

つまり精神が変化したらその分スタンドが強化されたり弱体化したりする。

「・・・まさか、俺の精神がダンジョンにいたときより衰えたというのか・・・」

ディアボロは、ダンジョンから放り出されてプッチと戦って死んだ後から再び死に続けていた。

その死に続けている中で、スタンドや記憶のDISCをしまってい

る亀はどこかに行ってしまった。

ゴールド・エクスペリエンス・レクイエム

あの亀はディアボロのよそうだとGERによって生み出されたものだろうから滅びることは無いと考えたディアボロはいつか死ななくなったら探し出そうと思っていた。

しかし、それが後のある事態を引き起こすこととなる。

ディアボロが歩いていると、さまざまな花が咲いた花畑に着いた。

「花か。・・・だが、ここの花は手入れされていることから自然に生まれたものではないようだ。近くに人でも住んでいるのか？」

ディアボロはまずはここに住んでいる人から話を聞こうと思った。

だが、次の瞬間エピタフの数秒後の未来予知を見たディアボロは咄嗟にキング・クリムゾンを出し、

「キング・クリムゾン！」

キング・クリムゾンのスタンド能力を使用した。

ディアボロのスタンドのキング・クリムゾンは時を吹き飛ばす力を持っている。

だが、今のディアボロでは五秒が限界というところだろう。

ディアボロはキング・クリムゾンの能力を使うと背後を見た。

そこには、傘をディアボロに刺そうとしている女性の姿が見えた。

ディアボロは時の吹き飛ばしている空間で女性から距離を取った。

「時は再始動する」

すると、ディアボロの後ろに立っていた女性は驚いていた。

傘を突き刺したはずのディアボロが自分の後ろに立っていたからだ。

「・・・あなた、何者」

女性はそう言うと言ったディアボロの方に振り向いた。

ディアボロは冷や汗を流した。

このような経験はギャングをしていたときでもあまり無かったことだ。

ディアボロはそのとき、戦うという思いより生まれたのは・・・逃げるといっただけだった。

ディアボロは無意識のうちに彼女に背を向けて走り出した。

しかし、相手も逃がす気はまったく無いようだ。

彼女はディアボロを追ってきた。

「くっ・・・早すぎる、やつは人間なのか？」

このときディアボロはまだ知らない。

相手が妖怪であるということが。

しかも、その妖怪の中でもトップクラスの力を秘めているということ。

そして、このとき直感的にディアボロはこう思った。

ああ・・・死亡フラグが立ってしまったな

次の瞬間、ディアボロの体が女性の放たれた光線によって消し炭になった。

ディアボロ、女性の放った光線に焼かれ消し炭になり再起不能

ディアボロ、死す！？（後書き）

題名からしてネタばれすぎる。

もちろん狙ってやりましたよ。

ディアボロは死んでしまった。

このままこの作品も終わってしまう・・・わけないです。

次回も続きますよ。

ディアボロ、蘇る！

ディアボロ、再起不能

再起不能

再起不能？

ディアボロ、再起可能

「ぐあああああああ！！！！」

突如、さつき消し炭にされたディアボロが空から落ちてきた。

女性はいきなりのもので何があったかわからなかった、

さつき消したはずの男がこの場に空から落ちてきたからだ。

「こ、ここは・・・さっきいた場所だと・・・どうなっている」

ディアボロは今まで経験したことがないことに焦っていた。

今までは死んだらすぐまたまったく別の場所に出現した。

だが、今はさつきと同じ場所に蘇った。

「（どういうことだ・・・だが、今はそんな考え事をしている暇はなさそうだ）」

さつきの女性が傘を持ったままディアボロに近づいてきていた。

ディアボロは数秒前にエピタフで見ていたから簡単に回避することができた。

だが、傘の先端がディアボロの手のひらに刺さった。

「（ぐっ、あの傘本当に傘か？）キング・クリムゾン！」

ディアボロはキング・クリムゾンを発動した。

そして、幽香の背後に回りこむと手のひらから出ている血を幽香の目にかけた。

「俺の体から出ている血はもう俺の体ではなく、物体だ！そしてく



たばね！」

ディアボロはキング・クリムゾンの手で女性に打撃を加えた。いくら女性とはいえ、一度でも自分を殺したのなら迷い必要は無かった。

だが、打撃を加えた後ディアボロは驚いた。

いくら現時点でスタンドとしての力のレベルがBからCの間だとしても、人間を手刀でアジの開きのようにするのは簡単な話だ。

だが、女性は打撃を加えた肩から多少血が出る程度だった。

「（馬鹿な！？弱体化していてもこのキング・クリムゾンの力に耐えるとは・・・まさか、こいつスタンド使いか？いや、だがこの世界にいと決め付けるのはまだ早い）・・・ちつ、時は再始動する」

現時点のキングクリムゾンの起動時間の五秒が経って時は再び正常に動き出した。

女性はいきなり方に衝撃が走ったことに驚いた。

ディアボロは三十秒程度間をおかないともう一度時を吹き飛ばせないことに気づいていた。

だから、ディアボロはそのままキング・クリムゾンで女性に殴りかかった。

完全に止めを刺すために頭を狙って。

しかし、女性はキング・クリムゾンの腕を見た（・・・）。

そして、次の瞬間女性の体からディアボロには見覚えがある・・・スタンドが出てきた。

「何……だと!？」

女性の背後から出てきたスタンド。

それは、  
GEだった。  
ゴールド・エクスぺリエンス

ゴールド・エキスペリエンスはキング・クリムゾンの攻撃が当たる前に、

無馱無馱無馱無馱無馱無馱無馱無馱無馱無馱

ラッシュを仕掛けてきた。

ディアボロは咄嗟にキング・クリムゾンの腕を自分の前にクロスさ

せてガードした。

しかし、ゴールド・エクスペリエンスの力がCとしても車を吹き飛ばすくらいはできるのだから、当然ディアボロはラッシュの勢いで吹き飛ばされて木にぶつかった。

「ぐはっ・・・なぜ、やつがゴールド・エクスペリエンス。ジョルノのスタンドを」

そのとき、ディアボロはある可能性が一つ浮かんだ。

そう、それはディアボロが不思議のダンジョンで集めたスタンドのDISCだった。

「（まさか！・・・いや、それしか考えられない。・・・試してみるか）」

ディアボロは背後からキング・クリムゾンを再び出した。

女性は傘を地面に突き刺すと、そのままゴールド・エクスペリエンスを出した状態で向かい合った。

二人が考えていることは同じだった。

スタンドで頭を叩く。

そして、二人は同時に動いた。

そして、

『無駄無駄無駄無駄無駄無駄！』

ゴールド・エクスペリエンスが先に動いた。

しかし、ディアボロの方は予想外の行動に出た。

「！・・・常人がやることじゃない」

なんと、殴りかかった右拳が届かないと知るとその右拳の勢いを消さないまま右腕を手刀で切った（・・・）。

とうぜん、本体にもそのダメージがくる。

ディアボロの右腕はちぎれて地面に落ちた。

「ぐっ！」

だが、ゴールド・エクスペリエンスの拳より先に切り取った拳が女性の頭に当たった。

そして、その衝撃で女性の頭からスタンドのDISCが出てきた。

女性は突如スタンドが消えたのを見て攻撃をやめた。  
ディアボロはそれを見て疑問に思った。

なぜ、無防備な状態の自分を殺さなかったのか？と。

「ふう、どうやら勝負は私の負けのようね」

女性はそう言うのと地面に落ちているゴールド・エクスペリエンスのDISCを投げ渡した。

ディアボロは残っている左腕でそれをつかんだ。

それに触ったとき、ディアボロはやはりと思った。

「（このDISCは・俺がダンジョンで取ったものだ）・・・なぜ攻撃するのをやめた？」

ディアボロはそういいながら左手でDISCを自分の頭に差し込んだ。

女性の方は平然とこう答えた。

「それが、今のルールだからよ」

ディアボロはそれを聞くと疑問に思った。  
ルールとは一体と。

「ルールとはどういうことだ。それに、なぜお前がDISCを」

女性はスタンドのことを詳しく知っているディアボロに驚いた。

そして、今の状態について話すことにした。

「・・・この土地、幻想郷である日妙な円盤が現れたの。そして、それは力のあるものが触れたら・・・勝手に体の中に入ってしまった。  
種族関係無しにね」

ディアボロはその話を聞くとスタンドの矢のことを思い出した。

スタンドの矢、それはスタンド能力を引き出す矢のことだ。

ディアボロはその矢を見つけた第一発見者だ。

その矢のことはそこのやつよりは知っているつもりだ。

そして、その矢自体がさす相手を選ぼうとすることもあるということとも知っている。

その話を聞くと、ディアボロはまるでDISCが相手を・・・入る相手を選んだかのように思えた。

「その事態の深刻さに気づいた八雲紫は、あることを提案した。それは、・・・戦ってその円盤を奪い取るということ」

ディアボロはそれを聞くと驚いた。

自分の知らない見知らぬ土地で、このようなことが起きていたことに。

「おそらく、全部の円盤を奪ったやつから八雲紫が全部奪い予定だったんでしょうが。まあ、おそらくそれが幻想郷に被害をもたらすものだとは八雲紫が認識して起こしたんでしょうけどね」

ディアボロはまだ幻想郷のことを知らない。

ゆえに女性が言っていることは半分も理解できなかった。

だが、わざわざそんな大掛かりのことをするということはかなりの数のDISCがばら撒かれてしまったのだろうと理解した。

「・・・あなた、もしかしたら何か詳しいことを知ってるの？それにあなたの体を消し飛ばしたときあの円盤は出てこなかった。・・・どうということなの？」

ディアボロは、話そうか否か迷った。

だが、目の前の女性はDISCの詳しいことはおるかスタンドの定理すら知らないようだ。

だが、次の一言で自分が話さないという考えはないことを知った。

「言わないとあなたを殺すわよ」

そう笑顔でいわれたら答えざるおえない。

いくら死に続けてきたとはいえディアボロは人間だ、死ぬのは怖い。自分の防衛本能には逆らえず、ディアボロはスタンドとDISCのことを話した。

もちろん、不思議なダンジョンのこととGERのことは伏せて。

「ふうん、そう。・・・私は風見幽香、あなた名前は」

別にあまり興味を持った様子をしなかった幽香はディアボロに名前を聞いた。

「ああ、俺の名はディアボロ」

ディアボロはそういいながらゴールド・エクスペリエンスのみ（・・・

」を出して腕を治療している。

正確には近くに落ちてた石で自分の腕の部品を作ってくっつけているだけだ。

幽香はディアボロの話よりはそっちのほうに興味を持っていた。

ただし、DISCがなくなつた幽香にスタンドは見えることは無い。だが、もちろん部品ができるのは見える。

しかし、さっきの戦いでラッシュしかなかったということは。

どうやらゴールド・エクスペリエンスの本来の能力、生命を与えることを知らなかったようだ。

「スタンドの説明は聞いたけど、ある意味それは能力持ち（………）として分類されるわね」

ディアボロはおそらくスタンドの他にも波紋などもその中に入るのだらうと思った。

実際スタンドは一般人からしてみれば超能力のようなものだからだ。

「とりあえず、あなたはどのようなの？ ……まあ、あなたが言っていたスタンド使いの鉄則でスタンド使いはひかれあうというのがあるらしいからどこかに隠れても意味は無いと思うけど」

ディアボロは考えていた。

ゴールド・エクスペリエンス・レクイエム

今のディアボロの目的は、GERの呪縛から解かれて植物のように平凡に暮らすことだ。

だが、スタンド使いと関わるということは逆に自分を死のふちに招き平凡な生活から遠のいてしまう。

しかし、スタンド使いはひかれあうから逃げることは無理だろう。

ならば、

「……ならば、俺がスタンドのDISCをすべて回収して平凡な生活を送る術を探すまでだ！」

ディアボロはそう考えた。

だが、ここで一つの大きな問題がある。

それは、スタンドの強さである。

スタンドは精神力によって強さが変動する。

だが、今のディアボロは精神力が弱まっている。

つまり今キング・クリムゾンは本気を出せず、ディアボロがダンジョンでできた四つのスタンドを同時に使うというのも不可能だ。だが、スタンドは波紋と同じように使わなければ衰えていく。

「（つまり、死に続けている間は使っていなかったからかなり弱体化しているわけだからスタンドと戦い続けることで徐々に回復させていけばいい）」

ディアボロは決心した。

スタンドのDISCを集めて、ゴールド・エクスペリエンス・レクイエムGERの呪縛からとかれて平凡に暮らすことに専念すると。

「・・・では、またな幽香」

そう言うときディアボロは幽香の花畑から離れていくために歩き出した。

幽香はそんなディアボロを見ていた。

そして、あることに気づく。

「彼、幻想郷の土地知らないみたいだから迷うんじゃない。それに、彼が言っていたしに続けるということは」

すると、歩いているディアボロが突然倒れた。

幽香はなぜディアボロが倒れたか木になったので近寄ってみた。

すると、ディアボロが歩いていた足元に靴跡のついた糞が落ちていた。

「もしかして・・・ショック死？」

今日のディアボロ、糞を踏んでショック死。

「こんな様子で、大丈夫なのかしら彼は・・・」

幽香はがらにも泣くディアボロの行く先を心配した。

## ディアボロ、蘇る！（後書き）

ちょっとした基本設定。

スタンドのDISCでスタンドを使えるようになってもそのスタンドの力を完璧に使いこなせるという確証は無い。

そもそもスタンドは相性の問題がありその相性が完全に一致するということとはかなり低い。

スタンドを（精神力が元に戻っていたら）四つ同時で使えるディアボロでもそのスタンドを完璧には使えない。

スタンドのDISCは頭に強い衝撃を与えると出てくる。

ただし、ディアボロのキング・クリムゾンはディアボロが元々所有しているスタンドのためDISCとして抜けることは無い。

ディアボロの今の精神力では二つのスタンドを同時に使うことは不可能です。

スタンド使いと戦ったびにだんだん経験が積まれて戻っていくという感じです。

しかし・・・このままではディアボロが最低一話に一回死んでしまう。

それと募集をします。

東方のこんなキャラにこういうスタンドを使って欲しいというのを募集します。

もしかしたら、話の内容に東方キャラがそのスタンドを使うかもしれません。

スタンドは第六部までのスタンドをお願いします。

## ディアボロ、スタンドバトルをする

ディアボロは森の中を歩きながら考え事をしていた。

幽香が言うには、スタンドバトルは……この幻想郷で行われていた弾幕ごっこのように……ごっこ遊びとしてしか見られてないらしい。

ただ、弾幕ごっこにスタンドと肉弾戦が加えられたというわけで。スタンドで命がけで闘ってきたディアボロからすれば、それはなまっちよろいと思えなかった。

「まあ、なるべく争いごとにまま着込まれたくはないし……な！」

ディアボロはキング・クリムゾンの裏拳で襲ってきた妖怪の顔面をつぶした。

ちなみにこれはエピタフでの未来予知で見たことである。（ただし

ま6秒後までの未来を見ることができる）

森の中を歩いていると妖怪がたくさん襲ってくる。

だから、スタンドを常時出して戦わないといけないことになっているのだが……

「（まだ雑魚ばかりでよかった。やはり弱体化してるとはいえキング・クリムゾンには勝てないみたいだな）」

ディアボロが森の中を歩いてあっている妖怪はすべて弱小妖怪ばかりである。

その殆どは人間の形を取ってはいない。

まあ、ディアボロなら人間の形を取っていてもお構い無しだろうが。

「俺は平凡な生活を望んでいる……それを阻害するものがあるのなら誰であろうと始末する」

何かすごく物騒なことを言っている。

たとえるなら吉良吉影のような考え方をしている。

そんな感じでディアボロが歩いていると変な神社が見えた……が無視して先に行くことにした。



「（あそこには俺を死に至らしめる魔物が住んでいる気しかない）  
」  
というわけでディアボロは神社には行かずに別のところに行くことにした。

とは言っても、幻想郷の土地やある場所については人里程度しか教えてもらってはいないのでどこに行けばいいかわからないようだが、もちろん、幽香には聞いたらしいが

『そのぐらい自分でどうにかしなさい』

の一言で拒否されたらしい。

ある意味幽香らしいといったら幽香らしい。

ディアボロはそのまま神社の道として多少整備されているところを歩いている。

ちなみに幻想郷で力を持っている妖怪の大半は空を飛ぶことができる。

だが、ディアボロはそれができない。

できたとしてもキング・クリムゾンの脚力で飛び上がる程度だろう。それをしても何かしら壁や木などがないと方向転換ができない。

スタンドの中でも自分を浮かせるスタンドは・・・あるにはあるが正直被害がでかいたため使う意味もない。

最低ハーミット・パールがあれば楽に空を飛ぶように見せるくらいはできるのだが・・・

ディアボロがそんな風に考えていると、草が揺れる音がした。

すると、草むらから氷のように透き通った羽を生やした少女が現れた。

「おまえ！さっき変なの出してたなー！もしかしてスタンド？」

ディアボロは変な羽を生やした少女がスタンドを見せていたことに驚いたがすぐにキング・クリムゾンを出して身構えた。

少女の方も背後から鳥のような形をしたスタンドを出してきた。

「あたいはチルノ。闘う前に挨拶するのも礼儀だって聞いたことあるからいつて見たけど」

ディアボロはスタンドを見ながらそれを聞いていた。  
そしてチルノが持っているスタンドはディアボロはすぐに理解できた。

「（あれは、ホルス神か。氷を使うスタンドだが・・・スタンドは単純なほど強いが多い。あのスタンドも厄介だな。だが）俺の名はディアボロ。以後よろしく頼む」

ディアボロはそう言うときチルノにお辞儀をした。

「うん！よろしくねディアボロおじちゃん」

「（お、おじちゃんだと！？このディアボロが・・・おじちゃん呼ばわりされるだとお！？）」

ディアボロはおじちゃんといわれて内心かなりショックを受けていたがチルノが気づくはずもなかった。

そして、ディアボロが言われたショックで死に掛けたことも知るはずがない。

しかし、そんなことを考えている暇は無かった。

チルノが手から弾幕を撃ってきたからだ。

ディアボロはそれをエピタフの未来予知で少しは見ていたのでよける。

よけきれないものはキング・クリムゾンではじいたりしている。

「むゝ、氷符「アイシクルフォール」！」

すると、チルノがたくさんの氷の弾幕をディアボロに向かって撃ってきた。

ディアボロは弾幕をよけながら様子を見る。

すると、真ん中に攻撃の隙ができているのを見つけた。

「（よし、あそこに行けば・・・いやちょっと待てよ！？）」

ディアボロは真ん中に行こうとしたがすぐにそれをやめた。

そしてその直後に巨大なツララが弾幕の無い場所を貫いた。

ディアボロはやはりと思ったが今弾幕の嵐の中にいる。

今は何とかよけているが空が飛べない分それを持続可能とは思えない。

だが、ここは森の中である。

だから、ディアボロはキング・クリムゾンの脚力で飛び上がった。そして弾幕をキング・クリムゾンではじきながら木の幹の上に着地した。

そして、

「キング・クリムゾン！」

キング・クリムゾンを発動した。

ディアボロは木の幹を蹴ってチルノの背後の木に移動するとその木の幹を蹴ってチルノの背中に行き、頭部をキング・クリムゾンで殴った。

「時は再始動する」

すると、時が再び元に戻ってチルノは地面に殴られた勢いで叩き落された。

しかし、ディアボロはある違和感を感じた。

それは、DISCが頭部を殴ったのに出てこなかったことである。

そして、ディアボロの拳からは血が出ていた。

いくら力が弱ったキング・クリムゾンでも拳で殴ったぐらいでは地が出ることは無い。

「（あいつがそこまで硬いとも考えられん。そうすると・・・まさか）」

ディアボロはチルノの落ちた地面を見た。

すると、その地面は凍りついていた。

そしてその真ん中には・・・奇妙なスーツのようなものを着たチルノがいた。

「へっへー！やるね、けどまだまだあたいには勝てないよ！」

ディアボロはそれを見ると顔をしかめた。

チルノが使っている、もう一つ（・・・）のスタンドはディアボロがよく知っているスタンドの一つ・・・

「ホワイト・アルバムか。・・・コイツは厄介だな」

ディアボロはそうつぶやくと背後からキング・クリムゾンをしまっ

ゴールド・エクスペリエンス  
でGEを出した。

そしてさっき事前に拾っておいた小石を蛙に変えるとそれをチルノに投げつけた。

チルノはそれを見るとうれしそうに手を広げて、

「凍っちゃえ！」

ホワイト・アルバムの能力で凍らせた。

さっきの蛙はホワイトアルバムのいる距離から多少離れた場所で作っていた。

そしてどうやら散るのはホワイト・アルバムの真の恐ろしさに気づいていないようだ。

さっき凍らせてしまったのは、ゴールド・エクスペリエンスが作った蛙。

ということは、もちろんダメージは跳ね返る。

突然、チルノ自身に激痛が走った。

「くあつ!？」

ディアボロはそれを見るとチルノに近づき首下にある空気穴をキング・クリムゾンが指で・・・突き刺した。

チルノはかなりの痛みを感じていた。

そして、ディアボロは力をためて、

「キング・クリムゾンッ!!」

チルノの頭部を殴った。

するとチルノ自身にダメージが来ているせいかホワイト・アルバムにひびが入った。

ディアボロはそれを見るとそこにラッシュを仕掛けた。

そして、そこは見る見るうちにひび割れていき・・・最後にキング・クリムゾンの拳はチルノの頭部を砕いた。

チルノは頭からDISCが二つ出るとそのまま地面に倒れた。

ディアボロは体力を消費したのか息切れをしている。

「はぁ・・・はぁ・・・これで勝ちだな」

ディアボロはDISCを拾うとその二つを頭に差し込んだ。

するとそのDISCはディアボロの頭の中に入ってしまった。  
ディアボロはチルノの方を見た。

どう見ても頭部が砕かれていることで死んでいると思った。  
しかし、次の瞬間ディアボロは信じられない光景を見る。

チルノの死体が消えると・・・そこに無傷のチルノが突然現れた。

「何っ!？」

「・・・悔しい!負けちゃった」

チルノのほうは負けたのを残念がっているようだ。

ディアボロはそれよりもチルノがよみがえったことに驚いた。

・・・もつとも、ディアボロも同じようなものだが。

ディアボロは、とにかく今はここに住んでいる生き物の探索よりも  
DISCの回収を急がせることにした。

ディアボロはそのままこの場から立ち去ろうとした・・・が、チル  
ノに呼び止められた。

「あんた強いね!けど、今度は負けないから!」

チルノはそう言うのでディアボロに手を差し出した。

正直次は無いと思うのだがな、とディアボロは思っていたがとりあ  
えずチルノの手を握って握手をした。

その手は、思っていたより小さく・・・冷たかったがぬくもりがあ  
った。

ディアボロはこう考えると今まで生き物と意思を共有したり触れた  
りすることが無かったと思った。

実際、パッショーネのときもそのようなことはあまりなかったしす  
る気もなかった。

しかし、今となっては・・・そういうのも悪くないかもなと思っ  
てしまう。

それがいい事なのか悪いことなのかは知らないが・・・少なからず、  
いやなものではない・・・ディアボロはそう思っていた。

ディアボロはしばらくするとチルノと分かれて森の中を歩いていっ  
た。

おそらく運がよければまた会えるだろう。

ディアボロはそう思いながら歩いていた。

・・・のだが、思いふけていたせいか注意力が足りなかった。  
「ぶみっ!？」

突如、空から降りてきた少女にディアボロは踏まれてしまった。

その少女は正確には降りてきたのではなく落ちてきたらしいのだが・  
・・・今のディアボロが知るよしは無い。

ディアボロは・・・そのまま倒れて死んでしまった。

今日のディアボロ      空から落ちてきた少女に踏まれて死亡

## ディアボロ、スタンドバトルをする（後書き）

今回はバトル事態はあまり大きな展開はありませんでした。  
実のところチルノがスタンドを使いこなせなかったというのが大きな点ですね。

実は書いている途中でもし咲夜がDIOの娘だったらで、スターダスト・クルセイズのときに咲夜がDIOに会いに行ったらという感じで考えていたら、DIOが咲夜を操って承太郎たちに戦わせるという図が生まれました。

ちなみにスタンドは見えます。

なぜ見えるかという詳しい設定は考えていますが今は（というか小説にするかすら謎だけど）書きません。  
それでは次回まで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7397x/>

---

ディアボロは非日常的な日常に投げ込まれる！

2011年11月11日18時53分発行